

## 第2回上北の元気結集協議会会議録

日 時 平成19年8月29日(水) 13:30開会 15:45閉会

場 所 上北地域県民局・十和田合同庁舎3階「E・F会議室」

出席者 別紙出席者名簿のとおり

- 会議次第
- 1 開 会
  - 2 挨拶
  - 3 プレゼンテーション  
「上十三地域における広域連携の成果と課題について」  
青森大学経営学部学部長・教授 井上 隆  
「上北地域における産学官連携による地域資源活用の可能性について」  
北里大学獣医学部教授 高橋 弘
  - 4 議 題  
(1)「上北の元気づくりに係る提言」(骨子案)について  
(2)その他
  - 5 閉 会

### 議事の概要

#### 1 開 会

(司会)皆様、お集まりいただきましてありがとうございます。定刻となりましたので、只今から「第2回上北の元気結集協議会」を開催いたします。

それでは開会に当たりまして北村県民局長から御挨拶申し上げます。

#### 2 挨拶

(北村県民局長)第2回協議会の開催に当たり、ご挨拶を申し上げます。皆様におかれましては、ご多忙にもかかわらず、お集まりいただきありがとうございます。

5月29日に、「上北の元気結集協議会」を発足させ、第1回会議を開催した後の活動の経緯について、この場をお借りして簡単にご報告させていただきます。

まず、顧問については、会長である私が選任し依頼することになっておりましたが、大学教授等有識者5名の方々に、快くご承諾のうえ顧問に就任いただきました。それぞれのお名前や専門分野等については、後程、あらためてご紹介いたしますが、今回の協議会では、当地域の重要課題である「広域連携」と「産学官連携」について、顧問の一人である青森大学経営経済学部長の井上教授と、会員のメンバーである北里大学獣医学部の高橋教授のお二方に、それぞれの専門分野の視点からご講演をいただくこととしております。

次に、6月14日から29日までの約2週間にわたって、会員の皆様方に対する個別インタビューを実施し、更に、これらのインタビュー結果をもとに、7月25日から27日までの3日間にわたり、「農畜水産物の高度化とファンづくり」、「新幹線開業ビジネスモデルづくり」、「健康、安全・安心な地域づくり」の3つをテーマとする検討会を開催しました。

この検討会は、自由参加としておりましたが、皆様には積極的にご参加いただき、中には全ての検討会にご出席の方もいらっしゃいましたが、それぞれのテーマについて熱心にご検討いただき重ねて御礼申し上げます。

また、これらに加えて、当協議会の構成組織である市町村連絡会議と上北地域県民局内連絡会議を開催し、管内市町村及び県民局各部における協議を行いました。

本日は、事務局が、これらの検討経緯を踏まえて取りまとめた「上北の元気づくりに係る提言(骨子案)」をもとに、さらに総合的かつ体系的に検討・協議を行うこととしておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

上北の元気結集協議会が、上北の元気づくりの源となり、我々自身が、まず何をすべきか、また何ができるのかといった視点をもって、さらに議論を深めていきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

(司会) 次に、本日の出欠状況ですが、十和田商工会議所・櫻田様、三沢市商工会青年部の鈴木様、とわだグリーンツーリズム研究会の天間様、社団法人十和田湖国立公園協会観光婦人部会の森田様、野辺地町漁業協同組合女性部長の野坂様の5名が都合により欠席となっております。

また、野崎様からは、仕事の都合により遅れて出席する旨連絡をいただいております。

なお、本日は、アドバイザーとして、有限会社オフィス・エステの堤さんに出席いただくとともに、このたび顧問に就任いただいた青森大学経済学部学部長であります井上隆教授にもご出席いただき、「上十三地域における広域連携の成果と課題について」と題してプレゼンテーションをお願いしております。

次に、本日の進め方ですが、次第にありますように、まず井上教授と高橋教授のお二方から、それぞれのご専門分野の視点をもとにした上北の元気づくりの今後の方向性に関するプレゼンテーションということで、井上教授からは、「広域連携」をテーマに、また、高橋教授からは、「産学官連携」をテーマに、20分ずつお話しいただきます。

そしてその後、「上北の元気づくりに係る提言(骨子案)」について、プレゼンテーションの内容も参考にしながら、これまで行ったインタビュー結果やテーマ別検討会の検討結果などをもとに、事務局が取りまとめた「提言書(骨子案)」について、意見交換を行います。

なお、会議終了時間は15時半を目処にしております。

また、本日の配布資料は、次第の下段に記載のとおりですので御確認をお願いいたします。

### 3 プレゼンテーション

(司会) それでは、早速プレゼンテーションに入りたいと思いますが、ここで、講師である井上隆教授をご紹介させていただきます。

井上教授におかれましては、青森大学経営学部の学部長でもあり、経済政策論、産業論、地域経済論等をご専門としていらっしゃいます。また、国、県等の各種委員等を歴任され、特に昨今は、

七戸町が設置している「東北新幹線七戸駅活用プロモーション会議」の座長も務めていらっしゃいます。それでは、井上教授どうぞよろしくお願いいたします。

( \* 井上教授プレゼンテーション )

只今紹介頂きました井上と申します。実は、ピンチヒッターということで、2週間位前にこの会合の講演依頼を受け、レジメの作成が間に合いませんでした。そこで、お手元に、昨年10月に、「地域づくり」という雑誌に掲載した「上十三地域における広域連携の成果と課題」と題するレポートと、県庁の企画課の分室であるあおもり県民政策ネットワークがやっている「あおもり県民政策ネット通信」の会員からのページ欄に掲載された記事のコピーをお配りしておりますので、それに沿ってお話申し上げたいと思います。

今から8年前に遡りますが、平成11年、1999年ですけれども上十三広域連携計画研究会という組織を立ち上げました。これは、ちょうどその頃、旧建設省がやっている全国の公共事業に関するんな反発というものもあった時期で、10年位前ではありますが、建設省としましてはもう少し公共事業に関し地域住民のニーズを聴き取ろうと、あるいは既に出来上がった公共事業をできるだけ利活用してもらおうということで作ったものです。そこにはちょうど、今の元気結集協議会と同じ市町村にメンバーになってもらい、企画課長クラスの方々にお集まり頂きまして、広域的に地域を活性化して公共事業のパイプラインである道路整備に対して意見を伺ったり、活性化プランを提案してもらおうというような組織でした。ただ、私は漠然としていると思いながらも会長を引き受けたんですけれども、翌年には上十三地域の民間の方々、商工会議所、商工会、農協、漁協にいた方々にも入って頂きまして平成12年に、上十三地域広域連携塾というものを立ち上げまして、私が塾長を引き受けました。

その際、いろいろな方とお話をしましたが、戦後、高速交通体系が整備されてきて、いよいよ青森にも高規格道路が網の目のように張り巡らされ、さらには新幹線がやってくるということですが、しかし、こういう高速交通体系の整備というのは、恐らく青森県を今まで以上に衰退させるだろうというお話を申し上げました。で、そういうふうにならない仕組みを皆なで考えようということをお願いしたわけです。

ここにいらっしゃる方に申し上げるのは釈迦に説法かも知れませんが、戦後高度経済成長の中で、交通システムの進展に伴って、実は地域的には負け組と勝ち組の差がはっきりしてきたというのが戦後の62年のことでもあります。これは認識しておいていただきたいと思います。全国に家具の産地というのは数十カ所ありましたが、味噌や醤油の醸造所というのも数千カ所ありました。それが無くなってきたということです。道路整備がされて、物流コストが下がって、競争力のある産地が競争力のない産地を席捲していくという形で、かつて全国に数十ヶ所あった家具の産地は今4カ所を数えるところまで減っているわけです。物流コストが下がると、競争力のないところは負けていくという単純な論理です。昔はどこにでも家具の産地はありましたから、卓袱台なんかを造った会社の社員が背中に荒縄で背負って一軒一軒訪問して売って歩いたものです。それが今は、北海道の旭川とか春日部といったように4ヶ所から5ヶ所に減ってきたのも物流コストの低下に伴います。

全国の醸造所がなくなったのも、キッコーマンやマルコメ味噌が全国を席捲して地場型がなくなったのも、物流コストの劇的な削減がもたらした効果です。ただし、高速道路や高規格道路が網の目のように張り巡らされて、物流コストが下がったことだけでそのようになった訳ではなくて、も

う一つは流通業の再編に次ぐ再編の中で大手チェーンストアが地方にまで出て来たということもあり、それに対しても、高速道路網の発達というのが地域間格差につながり、勝ち組と負け組をつくってきたということは、知っておいてください。

つい何年前か前、大館へ行きました。するとそれまでは大館商工会議所が秋田の高速道路を延ばしてほしいと要望していたのが、本当に延びだしたら、今度は来ないでくれと断られました。それは、大館の郊外にジャスコが移転したものですから、中心部が空洞化してこれはたまらんと。今までは商工会議所も市役所も一所懸命、当時の道路公団に対して「秋田から伸ばしてくれ」と言っていたのが、「延びたらうちの街は衰退するじゃないか」と騒ぎ出したというわけです。

それにしましても、ここ3年ぐらいの間に、県内では特に、直轄国道と一般国道のシェア率が落ちてきました。路線整備はかなり進みまして、さらに新幹線がやってくるなど、交通体系がガラリと変わります。上十三地域にインパクトを与えるのは交通体系の整備と、地域間交流基盤の高度化ですけれども、それが地域にどのようなインパクトを与えるのかという視点で考えてみよう、ということを提案したわけです。

そして、それを考えていくうえで、地域間の交流を拡大していこうということにしました。この地域間の交流とは市町村間の枠を越えた交流で、これを、広域連携と名付けました。広域連携とは具体的には市町村の境界を超えた連携で、何を連携させるかということ、5つか6つあり、ひとつは省庁間の連携です。国の省庁の出先機関はお互い別々の仕事をやっていますして大変無駄の多い仕事をやっていると思います。例えば青森市の例ですが、国道のバイパスと農道が数メートル離れた間隔で数十キロ走っているのが至る所にあります。青森の西バイパスから蓬田方向に行く国道のバイパスができるんですが、そのすぐ脇に農道ができていまして、耕耘機はどちらを走っているかという国道を走っているんです。それで、農道は何も走っていないという状況です。道路財源はたくさんあるんでしょうが、この辺が道路財源の一般財源化といった議論につながるのではないかと考えます。この省庁間の地方における連携、それから市町村間の水平連携、隣接市町村間の連携などで、一緒に仕事をやるにも、この連携のなかで一部事務組合や広域連合などが含まれます。

それから公民間連携、今まであるようでないのが公と民、官と民の連携ですが、私は、数年前からPFIを進めるべきであると県庁に働きかけまして、レポートなども提出してきました。しかし、なかなか県庁も市町村も動きがなく、微かに、それらしいものとしては、旧平館村の海に見える丘団地の景観に配慮した事業があるくらいではないかと思っています。それから、市町村を越えた民間事業者間の連携をやってみてこのような提案をしまいいりました。いずれにしてもそういう提案のもとで、上十三地域広域連携塾というのが出来上がり、ここ数年活動してきまして、それなりの成果を上げてきたと思っています。

広域連携政策研究会というのは、国道の青森工事事務所、青森県の県土整備事務所、上十三市町村の企画課長の方々をメンバーとして、広域連携をやる場合の方式などを考え、資料1の34ページのような形で、広域連携の必要性、可能性、現実性、課題について、活発な議論と情報交換を行ってきました。

この元気結集協議会では、移出産業、いわゆる域外と取引する産業を興そうということで、それは結構ですけれども、広域連携計画研究会では、地元において、地元の人が地元のことをよく知り、地域にある資源を掘り起こして、それでひとつのルート形成とか、観光形成に役立てるということを考えたわけです。それが第1点の「歴史文化交流回廊形成」で、2番目にこの地域は水に恵まれているということから、「小川原湖と海を活かした水辺の交流と連携」、3番目が「奥入瀬清流口マ

ンチック街道づくり」で、これは奥入瀬川に沿ってルートを開発するという方針を立てました。4番目が、「新しいなりわいの創出のための広域連携」ということで、新産業の創出、あるいは既存産業のプラスアルファづくり、産業クラスターということ。5番目が「くらしの豊かさを高める広域連携」で、福祉関係も含めて広域で取り組んで行こうとしたわけです。

また、当面実行すべき戦略的対応方針として、まず、広域連携施策推進の担い手育成とネットワーク化を図るということを挙げました。それと、割と地元の人には地元を知らないということがあります。生まれ育った街を出て、高校は八戸市で、その後は東京に就職して、振り返ってみたら上十三のことは何にも知らない、戻ってきてても上十三のことを何にも知らないということが割と多いと感じます。以前、下北に行って、今度新幹線が七戸に来ますが、七戸ってどの辺か知っていますかと聞くと、そんなところは知らないという答えで唖然としました。また、八戸へ行って野辺地はどこですかと聞くと、これも知らないということもありました。そこで、第2点目に、住民が地域を知る機会の拡大という点をあげました。

それから、3番目に、住民と域外の人々の共感に支えられた象徴的・効果的な事業の着手ということを提起しました。これは、上北に対する域外の人々のファンクラブを作ろうということ、具体的にどういったことをやったかということ、集まっていたいただいた数十人を2つの部会に分けました。最初は4つの部会がありましたが、最終的に2つにして、一つは文化観光部会、もう一つは道と水の部会という部会を作りました。そしてこの部会でここ数年間かけて、学習会やワークショップ、フィールドワーク、事業立案などを行い、それに基づきましてフォーラム開催や冊子の発行、イベント開催などをやりました。首都圏には上十三出身者あるいは出身者ではないが鉄道ファンという方がたくさんいるということもあり、レールバスというのが七戸に走っていたことから、全国に向けて、レールバスに関する思い出の手紙を募集したところ、数百通の手紙が舞い込んできまして、それを一冊の本にまとめました。売れたというか、要望があってあちこちに配りました。どの手紙を載せるか載せないかということで、審査員をやりましたが、大変時間がかかりました。

その他に、上十三地域のイベントを共同でやっていくということでポスターを作ってJRの駅に頼んで張りまくったり、あるいは地域の観光パンフなどの作成は、通常広告代理店とかに頼むのでしょうけれども、地元の人の手でこれらパンフレットやマップを作るなど、いろんなことをやってきました。そして、毎日毎日活動の記録をとり、これが17年度の記録、これが16年度、これが15年度という具合に部会全部の活動の記録を作ってきました。こうした活動のなかで何が生まれきたかということなんですが、七戸文化村の道の駅のレストランで、馬肉ラーメンを売り出そうというようなアイデアはこの運動の副産物になります。

それから、七戸駅の開業に向けて、いま活性化のための委員会が動いておりまして、どういう訳か私が座長をやることになったんですが、そこに様々なアイデアや、上十三広域連携塾の塾生達からの提案が寄せられています。また、道の駅があちこちにできていますが、そこにもいろいろな提案が寄せられています。この運動はまだ継続中でありまして、国土交通省がつくりましたこの上十三地域広域連携塾の運動と、今回、上北地域県民局が設置した元気づくり協議会とは、方向や組織が似ているところがありますので、いくらかご参考までにとおりました。私からの報告は以上です。

(司会)ありがとうございました。質疑等は、この後の意見交換の場で併せて行いますのでよろしくお願ひします。

続きまして、高橋教授をご紹介します。

高橋教授におかれましては、今年の4月から現在の北里大学獣医学部教授として十和田市に着任されましたが、それ以前は、株式会社三菱総合研究所の地球環境研究本部長や常勤顧問、国立宇都宮大学の理事兼副学長などを歴任され、特に環境計画学がご専門でいらっしゃいます。当協議会には、地元北里大学を代表し、また上北地域の今後の産学官連携の推進を図るための専門家として、ご参画いただいております。それでは、高橋教授よろしくお願いいいたします。

( \*高橋教授プレゼンテーション )

只今ご紹介いただきました北里大学の高橋です。ご紹介にもありましたように、私、教壇に立つのは初めてです。そして上北地域の理解をするということで、勉強中の新米と言うことですが、紹介の中にもありましたように三菱総研時代は25年間、環境にも携わっておりました。地域振興、特に農林水産業の振興についても、平成3年か4年から10年間、部下をつれて電源特会の予算で下北地域、上北地域のいろんな特産品対策にも関わってきました。三菱総研の最後の時代は、部下もいろいろ育てまいりまして、本部長や常勤顧問の方へ追いやられましたが、その育てた部下が東京大学の産学公連携あるいは産学官連携に関して、特任教授として何名か派遣されております。本日は産学連携による上北地域の資源を活用した可能性について述べるという試験問題をいただきましたが、私自身も上北地域を十分理解していないということで、私が今まで経験した、あるいは部下が経験した内容を取りまとめて、かつ、上北地域の可能性について話題提供していきたいと思っております。

レジメは5章で構成していますが、まず、最初は、加速化する産学連携ということで、なぜ今、産学連携が問われているのかということについてお話しします。それから、同時に日本で一番進んでいる産学官連携のトップスターは東京大学なんですが、これは、私の部下が何人か教授に就いてますので、その辺の話を。で、さすが東大だなというのが、非常に金を集めるのがうまいです。そして、三菱総研を終えた後に、宇都宮大学の方に行きまして、地方都市、あるいは地方の大学と産学、そのときは公と言いまして、国よりも県や市町村との連携を深めようということで、産学公連携の仕組み作りをするために、比較的、東日本で進んでいるところといろいろな情報交換をしたり、市場サーベイ、あるいはコミュニケーションを高めて、得た情報が三番目の岩手県での活動です。その結果を踏まえて、それでは栃木県ではどのような構想をもっているのかということが4番目で、ここの提言書は、私も、随分関係しまして、向こうにいる間に原稿を全てチェックして、最終的に知事に提言するという形になりました。そういう経緯をふまえて、最後に5番として、上北地域における可能性ということを述べます。ただし私の上北地域における情報は、私自身が平成3～4年から10年間、部下を連れて時々こちらを訪れるなどして知り得た農林水産や観光関係の情報であり、多少古いかも知れないので、この古い情報のご訂正は、質疑応答時間にさせていただければありがたいと思えます。

まず、最初に、加速化する産学連携ということですが、産学連携はいろんな意味で古くからありました。私も三菱総研時代は、学校の先生にいろいろな調査研究の委員会に入っただき、多面的な角度からサジェスチョンをいただくという方法でやっていたし、大学は大学側で、自分の研究の理論の裏付けをする、あるいは理論付けをしていく上で産との連携が必要になります。これは社会科学もそうですし、自然科学、特に技術開発に関しては、三菱重工と東大工学部とが連携しているとか、あるいは日立が東大と連携しているということも昔から言われています。私も1970年に学部を卒業いたしまして、航測会社に就職いたしました。その当時、東大の生産技術研究所に

新しい技術が入ってきそうだと、特に航空写真測量関係の次世代技術が入ってきそうだということで、東大の生産技術研究所とカメラの大手企業が一緒になって、アメリカのリモートセンシングの技術を導入いたしまして、その技術が日本にどのように展開していくのか、産業振興につながっていけるかということで、センサーの開発を行いました。これは、アナログ形式でいえばカメラセンサー、デジタル形式でいえばサーマルマッパーという中間温度赤外線を開知する機械を作ろうということで、メーカーと航空写真の計測屋と先生方の三者で取り組んだものです。更に、今は赤外センサー写真と言いますが、可視光領域の一部分からさらに近赤外領域をとらえるアナログ型の画像解析機の開発に従事いたしまして、主にどういう活用をしたかということ、植物のもつスペクトル、反射特性をうまく利用して、波長域ごとに光を捕らえるような写真をとるということをやりました。植物が健康であれば真っ赤な映像が撮れますし、葉緑素が落ちてくると、くすんで白っぽくなります。これは、当時の1970年代は公害問題が大きかったことから、公害にやられた樹木を把握するという活用がなされました。それから、農作物の生育状況を調べるということや、水面での汚濁排水の状況を把握するという活用でも使われたり、中間赤外、サーマルマッパーという、温度領域を把握するものについては、原子力発電所から排出される温排水の拡散域を捕らえるのにぜひ活用されました。

そういう意味で、古くは地域活性化に向けた産学官連携、委員会、研究会、共同研究等。更に、最近、少子化とか、国立大学の法人化のために毎年1%カットされているということで、国立大学もあせってきて産学公連携をしていこうと、同時に、足下のニーズにもっと貢献しなければならないという状況ができています。それから地域は地域で自立戦略のために地元の大学に協力して欲しいと、あるいは地元企業に協力して欲しいという動きができています。そしてそれに貢献していくためには、特に大学の持つシーズ、シーズというのは種ですね。こういうふうな技術あるいは研究実績を持っている大学のシーズと、産業界がどうやって商売に転用しようかというニーズをうまくドッキングすべきなんです。シーズ・ニーズの分析というのは、工学系では、大分進んできておりますが、農学部とかの一次産業系の学部では進んではいません。そういうところで行政の支援というのは非常に大きいんじゃないかなということが岩手県でも言われていますし、栃木県でも言われています。

そのために、どういう進め方があるのかということで、ひとつの大学が先行して行うものを一大学型といいます。それから、地域の大学が連携して行うものがコンソーシアム型です。一大学型というのはオールマイティの研究者がいるということで、典型的なのは東京大学ではないかなと思います。コンソーシアム型は各専門の単科大学に近い大学が連携してやるというやり方で、栃木県の場合はコンソーシアム型で進めております。それから、コンソーシアム型で比較的進んでいるのは、京都圏、近畿圏、それから石川県などです。一大学型の大きな例は東京大学ですが、地方では岩手県なども成果を挙げているところではないかなと思います。ただ、東京大学はあまりにも大きい大学なのでサラッと流しますけども、例えば東京大学も従来はフォーラムとか政策研究、政府への提言等をいろいろやってきましたが、大学の中に産学連携本部を作って、「東京大学TLO」という株式会社を作って、特許出願をするというような方向に動き出していまして、それも、一部の有志の先生方が発端となって行ないました。それと同時に、大学の総長を含めトップクラスがもう少し産業界と連携を深める必要があるんじゃないかということで「東京大学産学連携協議会」というのを作りました。そして、産業界と大学トップの交流ということで510社が集まったそうです。すごい数ですね、やっぱり東京大学。それで510社が、経団連加盟の各社が音頭を取りながら東京

大学を支援していこうということで、大学の持つシーズをできるだけ産業界でも活用しようという方向でいろいろ議論しています。それから独自に会社をつかって、「東京大学エッジキャピタル」と言いますが、特に、知財、知的財産や技術・人材をもっと活用できないかということで、民間にも相互に研究者を派遣して、三菱総研からも特任教授で行っております。聞くところでは、22社が支援に協力して83億円を集めたそうです。一応、目標は100億ですが、去年聞いた話ですから、今では100億円近くになっているのではないかと思います。東京大学産学連携協議会を頂点に、東京大学では今3つの重点課題ということで、共同研究、知的財産の更なる活用、そして事業化の推進ということで、一つのビルがエッジキャピタルに貸しているような状態で、非常に活気のある状況で皆さん研究をしております。今は、この3つの重点課題を達成するために、より基盤の形成整備が必要であるということで、研究・研究者検索システムの開発を真剣に行っているそうです。そして外部からの検索が可能ないように連携強化を図っていくこととしています。この研究・研究者検索システムというのは、先程申し上げました大学の持つシーズのデータベースで、どういう先生がどういうテーマで研究し、どのような特許を持っているのか、というものを学外からも検索できるようになりますと、いろいろなコマースベースにのった事業化ができていくんじゃないかと言われていました。

それから同じように、お金をそんなに投資できないけども、ヒューマンコミュニケーションで非常にうまくやられているケースが岩手県です。レジメの3番目の岩手県の活動としては、「岩手ネットワークシステム」、いわゆるINSという組織を平成4年から設置しています。これは、「岩手・飲んで・騒ごう」というのが、産学と公の連携の原点であるということで、このINSに目標を置いた形で進めていますが、今は、特に産学官連携による地域発展と地域の自立戦略を展開しています。現在、産学官のメンバーとして1,000名の会員がいて、ネットワークシステムの下に設けた38の研究会、分科会で、テーマごとに産学官の方々がいろいろな議論をし、商品開発等を行っています。特に驚いたのは、市が予算を確保して、例えば「花巻市起業化支援センター」というのを花巻に設けて、産業界の関係者と岩手大学の研究者の両方の方々が研究できる施設を整備して製品開発を行っている点です。それから、北上市も同じように、「北上オフィスプラザ」を設けて、ここは確か、南部鉄の技術をさらに発展させた鋼系の研究施設を中心とするもので、岩手大学の修士クラスの大学院の研究所もここに併設し、大学院の修士や大学の先生も、頻繁にここを訪れ、地元の産業界の方と交流を深めているなど、非常に活性化された施設という印象を受けます。また、岩手大学においては、キャンパスの中に「盛岡市産学官連携研究センター」というのを誘致しており、2年前に訪問した際に説明を受け驚きましたが、多分今は完成して稼働しているのではないかなと思っております。これは電源特会の予算を充当して岩手大学の敷地の中に、大学は一銭も出さずに施設の整備をして、それで産学官の連携を図っていきたいということで、非常に注目される施設だと学長がおっしゃっていました。これも、市の方々が真剣になって、関係する国の補助事業や交付金事業がないかといういろいろ調べ、地元負担の少ないものを用意したという点が特色かなというのが印象です。

岩手で非常に重要なのは、産学公のコミュニケーションであるということで、その第一はノミネーションではないかというのが彼らの結論でした。ノミネーションというのは、いろいろ飯を食べながら多少のアルコールを入れて本音で話し合えよう、本音で話すことによって新しい次のステップの目玉が出て来るのではないかということが言われています。

そういう成果を踏まえて、栃木県では、経済同友会が県経済の二重構造の打破のためにいろんな議



論を始めました。経済同友会の中に産業政策委員会ができて、私が顧問役で、毎月一回の勉強会でいろいろな議論をしながら、県経済の二重構造を直すためには何が必要かということで、やはり、産学公の連携が重要じゃないかと。栃木県の場合は誘致企業というのがあまりありません。むしろ東京からのシミダシ企業というのが結構ありまして、このシミダシ企業というのは本社の方に向いていて、地元にはあまり貢献しません。昔からある同友会のメンバーというのは、そこで自立した進出企業の社長さんが多く参画して組織を運営しておりますが、そういう方々もバブルがはじけて県内で一致団結した経済政策をとるのは非常に厳しくなっている。特に栃木県は東北地方への通過県ですので新幹線のときも東北自動車道のときも、取り立てて誘致運動をしなくても、全てのものが今まで出来てきたわけです。東北の人には感謝するけれども、自分たちは、汗水・金を出さない。それでは進歩といっても団結できないじゃないかということで、初期の段階は右へ行くか左へ行くかの議論でしたけれども、最後は和を求めて産学公の連携を、知事もしくは同友会代表幹事に提言しようということになり、いろいろ議論を始めて1年6ヶ月かかりました。今年の3月に提言書案が出来、今月(8月)の6日でしたが、私はこちらにいたので、儀式には行けませんでしたけど、一応、同友会代表幹事から知事に提言をしたそうです。その内容はここに書いてある内容です。産学公連携による地場産業の振興支援、特に高度技術開発を支援して欲しいということで、誘致企業と地場企業の連携をさらに発展させて欲しいということが示されています。それから、地方の危機に対する自治体の主体的取組ということで、県内にある18大学がバラバラに活動するのではなくて、連携をさらに強化して県内の産業振興に努めましょうと。そして18大学の連携を図るために、私が大学在任中に出来た「大学コンソーシアム栃木」で、先ず学内・大学間の連携を深め、同時に産業界と連携を深めようということで、大学コンソーシアムが各産業界と本格的に契約をしていこうという動きが出ています。また、ものによってはINSのような形で分科会等により個別提携を行う二段構えで進めようという方向で行っています。同時に、大学の所有する知財を地域に積極的に還元しましょうということで、大学コンソーシアムのシンク能力を活用しようということです。

昔、地元「栃木総合研究機構」というのがあり、もともとは三菱総研が人材を派遣したり、難しい課題については協力をしていましたが、足利銀行問題で廃止になったことで、そういうシンクタンク機能が無くなりまして、それを大学コンソーシアムで受け入れないかとなりました。東京のシンクタンクに委託するとお金だけ取られて実績が残らないし、成果も残りません。しかし地元でそういうシンクタンク能力を備えておけば、何十年もデータは残りますし、知財が残るということで、そういう組織化ができないだろうかという議論をしています。それから、誘致企業と地域経済を更に連携強化するというので、中国市場を睨んだ連携ができないかということも、先般、中小企業の方から言われています。やはり一番重要なのは経営再構築、総合力の結集、いろんな異業種のランダム交流が必要じゃないか、要するにノミニュケーションですね。そういうことで、実際に今、動き始めたところです。

そういう状況をふまえて、上北地域における可能性ということで、6つのことを書かせていただいておりますが。私が平成3、4年頃から10年間と、この4月に来てから、一番感じたのは、上北地域は豊かな環境資源を有し、食材資源が豊富だということです。ここに書いた、ニンニク、ナガイモ、ホタテ、これらは全部、ここ5ヶ月間に宅配で、関東の友達何人かに送りましたが、非常に評判が良い。それから、交流人口増大のポテンシャル大です。新幹線七戸駅開業ということで、私の卒論生も、七戸の効果について、ということが想定されるか、今、卒論の研究にいそしんで

おり、私も何回かこの地域を回っておりますが、非常にポテンシャルがありそうだし、しかし黙っていると通過駅になってしまう可能性もありますので、少し真剣に勉強して行かなくちゃいけないなぁと考えています。それから県外客や海外客も視野に入れるということで、米軍基地と東南アジアあるいはオーストラリアからのお客さん、この雪の降る地域、特に北海道ですが、そういう方々も上北地域に目を向けさせる戦略があつていいと思います。地域資源の再確認ということで、農畜水産物が優れていますので、その中から特筆できるものが徐々に出てくるのではないかと期待しています。そうすると、どうしても、まだ不足しているのは、INS、TNSのような取組であり、異業種や大学等の持っている知的財産とか情報というものが充分まだ共有されていない、活用されていないことから、知的財産などの持っている財産の中で、情報公開してもいい部分については公開する場が必要ではないかと思っています。そして、将来的には、INSやTNSのような産学公連携の場を、ここの上北地域に育てていただければありがたいと思います。

私も5年間の任期で北里大学に来ていますので、特にこの5年間は、上北地域の発展に貢献していきたいと思っています。この上北の元気結集協議会には、大学からおまえが行ってこいと言われましたし、産学公連携の推進に協力したいと思っていますので、よろしく願います。

(司会) ありがとうございます。

それでは、次に議事に入りますが、要綱第6条第1項の規定により会長が会議の座長を務めることとなっていますので、この後の議事進行は北村会長に引き継ぎます。

#### 4 - (1) 「上北の元気づくりに係る提言」(骨子案)について

(議長) それでは、議事に入ります。議題の1「上北の元気づくりに係る提言(骨子案)」について、事務局説明してください。

(事務局) それではまず、資料3をご覧ください。顧問については、上北地域の課題の解決のために重要な事項についてご意見を述べていただくとともに、協議会における施策の取りまとめに当たって助言いただくため、会長が有識者の中から委嘱することにしておりましたが、このたび5名の方々にご就任いただきましたのでご紹介いたします。

青森大学経営学部長の井上隆教授については、先程プレゼンテーションをいただき、司会の方からご紹介申し上げたとおりです。

株式会社電通消費者研究センターの酒井均研究顧問におかれましては、青森県関連の各種調査研究プロジェクトに携わっているほか、青森の特派員も務めていらっしゃいます。

青森県立保健大学大学院健康科学研究科の藤田修三教授におかれましては、餅小麦原料の商品化等、農林畜水産業と医科学との連携による健康で安全な商品の開発等に取り組んでいらっしゃいます。

北里大学獣医学部八雲牧場長でもある萬田富治教授におかれましては、資源循環型牛肉生産の実践研究に取り組んでいらっしゃいます。

青森公立大学経営経済学部の山本恭逸教授におかれましては、地域経済を専門とし、青森市中心市街地活性化等に取り組んでいらっしゃいます。

以上5名の顧問の皆さんについては、今後も協議会の協議状況等をお知らせし、随時助言等をい

ただくとともに、次回以降の協議会で講演をいただくなど、それぞれの専門分野を視点として、上北の元気づくりについてご指導をお願いすることとしています。

次に、資料4-1をご覧ください。当協議会の開催概要を時系列で整理しております。本日の第2回協議会で提言内容を協議いただきますが、今後の予定として、第3回協議会を10月に開催し、提言に基づき、実施時期や主体、実施方法等を具体的なものとするためのプログラムの作成について協議いただくこととしています。

続きまして、資料4-2は、会員の皆様を対象に行ったインタビュー結果とテーマ別検討会における意見等をテーマ別に整理したものであり、これをもとに資料4-3の提言骨子案を作成いたしました。内容は、提言骨子案に盛り込まれていることから説明を省略します。

それでは、次に資料4-3をご覧ください。

まず、1枚めくっていただきまして「目次」です。全体の構成は、「はじめに」と「提言の概要」に続き、「1 農・畜・水産物の高度化とファンづくり」、「2 東北新幹線開業ビジネスモデルづくり」、「3 健康、安全・安心な地域づくり」の3つのテーマと、「4 上北の元気づくりに向けて」の4章で構成しております。

次に、3ページですが、「はじめに」ということで、本提言の取りまとめの経緯と提言の性格を記述しています。特に、4段落目は、本提言が、協議会が県や市町村に提言するものではなく、また、協議会が提言を取りまとめて役割を終えるということでもないということ、本提言は協議会も含む上北地域全体に対する提言であり、それぞれが役割を分担し、連携をしながら具体的な取組に繋げていくものであるということに改めて共通認識として確認する意味で記述しているものです。

4ページ以下が本文となりますが、各章ごとに、テーマに基づき、「取組の方向性」、「提言の柱」、「具体的な取組内容」、モノによっては、「事例紹介」といった構成で整理しておりますが、時間の関係もありますので、この「提言の概要」をもとに説明いたします。

まず、3つのテーマに関する「現状と課題」と「提言の柱」についてです。

「農・畜・水産物の高度化とファンづくり」については、当地域は、農・畜・水産物のバランスのとれた食料供給基地であり、土づくりなど、生産技術の高さ、ながいも、にんにくをはじめとする全国一の生産量を誇る農産物があるという強みの反面、PR力の弱さ、ブランド力の不足、ながいもをはじめとする農作物価格の低迷等の弱みがあることから、強みを活かし、弱みを克服する取組が必要です。

従って、提言の柱を、「食育等」、「商品の開発、店づくり」、「起業家づくり」、「流通・販売促進」及び「知の結集」の5本としたところです。

次に、10ページの「東北新幹線開業ビジネスモデルづくり」ですが、2010年予定の全線開業に伴い、七戸に新駅が開設されますが、近年の旅行形態の変化等による十和田・奥入瀬観光の低迷に加え、観光スポットが乏しいこと、観光面での広域連携の取組が脆弱であること、情報発信力やPR力の不足といった課題を抱えております。

よって、新駅開業が、上北の元気づくりの契機となり、開業効果が一過性とならないように、また、上北が下北や十和田・奥入瀬、八甲田への単なる通過地帯とならないよう、開業に向けて、観光物産に係る施策を積極的に推進する必要があります。

このことから、「広域観光と受入体制の整備促進」、「資源の再発見と魅力づくり」及び「マーケティングと情報発信の強化」の3本柱で取り組むこととしております。

次に、18ページの「健康、安全・安心なまちづくり」についてですが、当地域は、自殺率が高いことや、地域のつながりの希薄化などが課題として挙げられます。健康で安全・安心な毎日を過ごせる環境を整えることは、住民が最も望むことであり、このことから、「安全で安心な地域づくり」「食からの健康づくり」に、地域を挙げて取り組むことを提言しております。

最後の19ページに記載している「情報の共有と連携・参画による地域づくりの推進」、「元気づくりに向けた新たな仕組みづくり」及び「協議会を核とした事業プログラムの展開」の3つの事項は、具体的な取組を進める上での必要事項を整理したものであり、「協議会のシンボル事業の実施」等により、地域の一体感を高めていくこととしています。

(議長) 只今事務局から説明がありましたが、顧問については、5名の先生方にご就任いただき、今回は井上教授にご出席いただいておりますが、今後も必要に応じて、様々な場面などでそれぞれの専門の見地から指導・助言をいただくということでご理解願います。

それでは、本題であります提言書骨子案について意見交換を行いたいと思います。まず、只今の事務局の説明に対して、何か質問はございますか。

(欠畑会員) 提言の2、3、4章の記載内容のトーンが多少違うような感じがして、なんとなく違和感を覚えるが、この辺のすり合わせはなされているのでしょうか。

(事務局) 3つのテーマ別検討会を開催しましたが、一人で全部ということではなく、それぞれ担当を決めて整理しております。できるだけスタイルを統一したつもりでしたが、具体的にどの辺に違和感をもたれましたでしょうか。

(欠畑会員) 4頁と7頁を比較しても多少トーンが違うように感じましたし、例えば「必要である」とか「すべきである」というような語尾の使い方も記述内容に応じて再度確認してみてもどうでしょうか。

(事務局) 提言骨子案の取りまとめに当たっては、先週、市町村の皆さんとの会議をやりましたし、局内関係部の意見も聞くなどし、随時修正加筆しながら作成しているところです。なお、会員の皆さんには、本日の会議資料ということで、先週の金曜日に送付しておりますが、その後も若干、記載内容の語尾とか一部表現が変わっている箇所もあると思います。そういう意味では、引き続き調整していくということで、更に、今日の協議会で皆様から様々なご意見もいただければと思いますので、それらを踏まえて全体のトーンや表現を一定の形で調整していきたいと思っております。

(議長) 次に意見交換に入ります。重要な課題と考えられる事項を中心に進めていきたいと思いますが、先程、井上教授から、広域連携をテーマにお話頂きました。また、提言書においても10頁と20頁で関連する記述があります。特に観光分野においては、広域連携の必要性が高いと思いますが、この広域連携の必要性と今後の方向についてご意見を伺いたいと思っております。

(田中(清)会員) 今までぼんやりしていた部分が、テーマ別に文章になったことによって、はっきりと見えてきたように思っています。一番大切なのは、最後の頁の「上北の元気づくりに向けて」の

部分で、元気づくりに向けた新たな仕組み作りという点が、これから大事になってくるのだろうと思います。

上北地域には、良い物がたくさんあるし、皆さんから多くの意見が出されて、私もそのとおりだと思います。PRもそうですが、ここにいる皆は代表で来ている、その会のつながりといいますが、町、県、民間団体等のつながり、広域連携をどうやっていくかが大事なところだと思います。

(佐藤会員)感想になるかもしれませんが、この提言は、成功事例が入っているのがおもしろいなと思って見せていただきました。今、私ども古牧温泉はまず再生というのが先にあり、北は北海道から南は鹿児島までの成功事例を見ていますが、何故、成功したのか失敗したのかという点で、かなり参考になると思っています。そういう意味で提言内容の観光の箇所で、もう少し事例があれば良いのではないかと思いますし、特に東北新幹線七戸駅開業については、すでに新幹線開業で成功したところや失敗したところがたくさんあると思いますので、古牧としてもそういう事例を入手したらいいなあという思いはあります。

(欠畑会員)先程事務局を通じてペーパーを配らせていただきましたが、日本政策投資銀行の藻谷浩介さんという新幹線に詳しい方の話しが記事になったものです。先程、井上先生もお話されましたが、高速交通体系ができることによるマイナス部分もあるということをしっかり押さえて、まちづくりや地域づくり、連携をしていかなければ、大きな失敗をする恐れがあるということです。ペーパーの裏側は、事務局からの関連する情報提供部分ですがこれも参考になると思います。実は、宇都宮に行って、昨夜戻ってきたんですが、ちなみに沼宮内、二戸駅でも停車しましたが、ちょっとという感じでした。そういう現実を踏まえながら、新幹線効果をどうもたらすのかといった部分においては、本当に広域での取組や仕組みを考えていかなければならないと思っています。

具体的な部分では、行政が主導でやる、民間がやる、やりたい人がやるという話の時に、仕組みとしてどう作るかということが大切になってくると思います。そういった部分においては、夢や感動ということ言えば、それぞれの部会でも話しをしましたが、住んでいる住人にスポットを当てた形でのいろいろな事業ができればいいと思います。

今、八戸で、八戸地域に関するSNS、ソーシャル・ネットワークキング・サービスというのが取り組まれ、結構あちこちで紹介されています。これは、人と人とのつながりを促進・サポートするコミュニティ型の会員制のサービスとそのサービスを提供するWebサイトのことを言いますが、上北地域でもこの地域SNSを立ち上げられればと思っています。それによって、観光もそうですが、おもてなしの仕方、いろいろな地域情報や景観スポット情報ということで、地域情報の広がりが出てくるのではないかなと思っています。いずれにしても、我々もITに使われるのではなくて、ITをいかに活用していくかという視点で、ネットを利用して広くこの地域を発信していくことが、そこに住んでいる人たちの共通の問題の解決手法としても有益であると思っています。

それと、今回の提言書骨子案が20頁ぐらいになっていますが、やはり長すぎるのではないかと思います。そこで全体概要がわかりやすいように、目次の部分に提言の概要をもっと分かり易く記載する必要があると思うんです。提言の概要、具体的な提案内容、成功事例といったものが、冒頭部分で概ねわかるようにして、そこから入り込むスタイルの提言骨子案にしていけば、なおいいのかなと思います。

(議長)観光分野に関する広域連携につきまして、今日出席いただいている県の新幹線交流推進課の濱館グループリーダーからもご意見をいただきたいと思います。

(県・新幹線交流推進課 濱館 G L)

広域連携の話ですので、私どもの方で承知しております県内の広域連携の関係についてお話しします。事例の中にもありますが、下北地域では、観光に関する協議会、観光協会や商工会議所主導の会議があったり、むつ市主導の会議があるなど、バラバラに活動していましたが、今年の3月19日にこれらの団体が一本にまとまって、下北半島全域をカバーするような広域の組織ができております。

これにより、今、着地型の商品開発が進められており、これは旅行業法の改正がありまして、3種の資格で隣接市町村までの間の旅行商品を作って売ることができる、という法改正に合わせた形で着地型商品の開発等に取り組んでおります。こういうことをやっていく際に、下北地域だけで解決できない、東青地区との連携ですとか、東青と中弘・南黒地区との連携が必要になってくると考えています。大事なのは、この地域全体をまとめていけるような広域組織がないと隣接地域との連携もできないということで、現状は、新幹線開業対策に関する七戸町の組織と、十和田市の組織とそれぞれ分かれています。県の立場からは上十三地域を広くカバーできるような広域の組織ができて、更に隣の地域とも連携できるような形になっていただければ、非常にありがたいなと思っています。

(日本原燃・木原部長(川井会員の代理))

川井の代理で出席しました日本原燃地域交流部部長の木原です。

先程、欠畑会員から紹介のありました日本政策投資銀行の藻谷浩介について若干説明します。この3月まで、私、藻谷の同僚で机を並べておりましたので、今回の議論におきましても県民局の方がヒアリングに来られる前に、藻谷と若干意見交換をしました。その際の話の内容で、先ず一つは、青森や八戸のように既存駅があるところとできるのと、七戸のように何も無いところとできるのでは意味が違ふと。何もしなければ何も起こらないし、何も無いからといって失う物は無い、やりかたによっては何かができることはある、ということが一致した意見でした。

二つ目はその中で、交流人口の増加ということに着目して新幹線を捉えるならば、来てくださるお客様の利便性を何処まで考えるかという、これには、2次アクセスの充実や、土産品や弁当の充実となるわけで、上北に来なければ食べられないとか、上北に来なければ買えないとか、そういうものを新たに作り出すことによって、上北あるいは七戸というものを認知させることができる。逆に東京にいる人にとっては、現在、上北はゼロだという基礎認識に立って、何をするかを考えるとというのがいいのかということ。

それから、交流人口でも同じことですが、居住者にとって考えた場合に、やはり駐車場が一番大切だという話になりました。八戸の失敗を繰り返さないように、七戸もその辺をかなり意識されているようですが、八戸の方がわざわざ二戸に行って新幹線に乗るような馬鹿なことが七戸で起こらないようにするということが重要である。また、上北地域という地域で考える場合は、三沢空港の利便性をこれ以上落とさないように、どうしたらいいかということ了新幹線に浮かれるだけでなく、反対側の方も目配りする必要があるんじゃないか、というところが二人で一致した結論です。

ということで、広域連携について、若干、私の考えを申し上げます。市町村合併で行政の区域

が変わってきたり、農協や漁協の管轄地域と行政のズレがでてくる。自然な形で地域を捉えるためにも、広域連携の考え方が不可欠になってくると思います。その中で、私のように、つい最近東京から来た者にとって、上北とは何かという質問に対して、誰が的確に答えてくれるかなという思いがあって、ここへ出席しました。上北郡というものを行政が人工的につくったといえぬことですが、歴史的地理的要因でこの地域を一つとして捉えるのであれば、そのことの必然性についての統一認識を持って、誰が誰に聞いても同じ様な答えが返ってくることで、はじめて地域のアイデンティティというのが高まるのではないのでしょうか。

もう一つ、私、今、地域の特産品づくりにお手伝いをさせていただいておりますが、そこでのテーマは、先程から紹介されました、長芋とかゴボウとかホタテとか、一つ一つ、その素材は確かに素晴らしいものですが、その一つだけに着目した特産品開発というのはやはり限界があるわけで、折角こういう広域連携をやるのであれば、それらの素材が組み合わされる形で、新たな付加価値を生み出す特産品開発をしていかなければいけない、ということが現在の問題だと思えます。また、提言書の中で、女性起業家の育成というのがありましたけども、男性か女性かとか、農業か漁業かということではなく、様々の担い手の方が、あるいは、1次産業・2次産業・3次産業の枠を越えて連携するあり方、そういうことも広域連携のあり方の一つとして、使い古された言葉ではありますが、いわゆる6次産業という連携のあり方も考えるべきではなからうかと思えます。

(議長) それでは、広域連携について意見を伺ってきましたが、最後に井上教授の方から今後の上北地域における広域連携のあり方、あるいは提言骨子案についてご意見を伺いたいと思います。

(井上教授) 提言骨子案の中で、ひとつ落ちている論点があるのではと思っています。上北地方では、まもなくやって来る新幹線開業がひとつの大きな環境変化になって、それが地域社会に大変なインパクトを与えようと思っておりますけども、併せて並行在来線の活用というのも意識して書いておいていただきたいと思えます。今、新幹線は八戸までですが、八戸から青森までが「青い森鉄道」になります。かなり青い森鉄道は、苦戦するはずなんですけども、しかし、青い森鉄道は将来にわたって地域の重要な交通機関であり続けましょうし、駅は地域の拠点であり続けましょうから、今までの全国的な経験を踏まえて、在来線を活用した地域の活性化も、どこかに書いておいていただきたいと思っています。

先程、六ヶ所の方からもお話ありましたが、青森県は広域連携が苦手な土地柄なんです。いろいろ理由はありますが、農協の統合が全国で一番遅れているとか、漁協の統合が一番遅れているとか、市町村関係では飛び地合併が、全国で一番、青森県が多かったと、それはもう呆れるほど出てきます。今、七戸駅の活性化の会議をやっていますが、そこに集まる周辺市町村の間でもかなり意見が分かれて、会議が険しくなることさえあります。駅名はJRが決めるんですが、駅名ひとつ決めるにしても十和田市と七戸町はそれぞれで主張しています。

1999年に山形新幹線が通りました時に、新城が近辺の8市町村を巻き込んでみんなで金を出してガッチリ組織をつくって広域観光の拠点にしたみたいな形にはうまくいかないだろうと思っているんですよ。そういう意味で、実は僕は青森県のいろんな仕事に係わってですね、行政枠を越えた、市町村の枠を越えた行政の仕事の連携にしても、民間事業者の連携にしても、あるいは他の都県ですと新幹線駅が出来て、近くの旅館業をやっている人達が金を出し合って駅前にビジネスホテルを作ったこともあるんですが、多分まだそれもないだろう。イオンは他の方からビジネスホテ



ル作らせてくれないかとかですね、それから七戸町の新七戸駅周辺に集客させるイオンさんが動き出しているとか、たぶん官でも、官と民でも、民の間でも広域連携は、かなり難しいだろうと思っています。先程ご紹介がありました全国のいろんな事業をこれから追々ご紹介申し上げながら組み立てていきたいと思っております。

いずれにしても今日のところは、こちらの方では先程申し上げました新幹線ビジネスモデルづくりに少し加えたのと、それからお土産の開発自体はいろいろ話があるのに、今までどこも成功していない、多分成功しないだろうと思いつつもやっている。つまり地元の人が新企画のお土産と言うだけであって、新しく作ってもうまくいかないんですよ。僕も以前、手懸けたんですが青森市の新製品の開発審査会というのを十数年前に立ち上げ、会長をやらされているんですけども、縄文、三内丸山遺跡が発見されてブームになって、それにちなんで土産品のお菓子を作ろうということで青森市内のお菓子屋さんが7社か8社集まってですね、「縄文の森」というお菓子を作って、青森空港で売るんだということになって、青森市の製品開発審査会が結局、開発費の70万円をあげたんですけど、作ったらちっとも売れなくて今はもう無くなっちゃたんです。地元の人はそのお菓子があったのかというような感じです。大体、今までの試みはどこでもみな失敗です。昔から地元の人が大好きな物をお土産にして通用しますから、私共は名古屋地区の「ういろう」を買っても全然美味しくないですよ。ですから新しいものを作ることも大事ではありますが、今あるものや資源を活用して、どうやって発信するかということが重要だと思います。また近いうちに、そういう話をすると、今日のところはそんなところで、広域連携は難しいけれどもやはりやる価値があるということをお伝えします。そんなところです。

(議長) 先程、高橋教授から産学官連携をテーマにお話して頂きました。また、提言書においても8頁から9頁に関連する記述があります。上北地域における主要な産業である農林畜水産業を今後更に振興していくためには、公設試験研究機関や北里大学等の知財を結集し、農業と環境、医療等との連携を図っていく必要があると思いますが、この産学官連携の必要性と今後の方向性についてご意見を伺いたいと思います。

県の研究機関である畑作園芸試験場の岩瀬さんお願いします。

(岩瀬会員) 研究機関の話ということで、多少狭い領域の話になるかもしれませんが、県の研究機関においては、短期的あるいは中期的、更には長期的な計画を立て、県の方針に照らし合わせながら、もちろん地域の要望するようなものを拾い上げながら洗い出して、それなりに取り組んでいます。具体的には、そのつど新しいことが起こりますと予算要求から始めて、いろいろな調査をしながら進めていきます。勿論、研究ですのでニーズがあることは大事ですし、シーズ、いわゆる研究の種ですけど、この種がどこまで育っているかということが大切になります。従って、種のかけらも無いようなものは難しいわけです。

それから、直接、担当できないようなことがあれば、もちろん他部門とも連携したりします。独自でも予算要求したい地域の問題、例えばにんにくの問題というようなことは、プロジェクトチームを組んだり、あるいは国と共同してやりたいものを提案していくんですが、今は研究全てに外部資金を持ってきた方がよいということになっていて、県から断られる訳ですが、非常に辛い立場に置かれています。また、なかなか大変なのは、評価というものが今ついてまわります。事前の評価があって中間の評価があって、事後の評価もあるんですけど、事前の評価を得てそれに受から



なければを勿論、予算要求ができない。一次審査が受かって、二次まで頑張っても、なかなかニーズとシーズがマッチングしないとダメで、そのバランスがあるし、それから中にはコーディネーター、いわゆる親分になって進めるところが頑張ってくれないとダメということもあります。我々が自らコーディネートするケースもあるし、他から頼まれて、我々がお客さんとして付き合う場合ももちろんあります。そのためにそれぞれの骨身を削って計画を立てるんですが、新規性がないとか、実現性・半実現性が乏しいとか、そういうところなどを指摘されてなかなか進まないことが多いです。

先程、保健大学の藤田先生ともち小麦の開発をしているという話も出ましたが、この商品開発ということで高度化事業に応募したんですが、落とされてしまいました。なかなか良いことをやろうとして、ニーズにも合っているんですが、我々の力が及ばず結果的にそうな場合もあるし、いろいろと頑張っているところでもあります。

何分にもニーズがまず初めにあって、それを吸い上げる機能、機構、コーディネーターが必要になってくる。というのは、コーディネーターは一人じゃなく、こういった地域の協議会などというのも考えられるのではないかと思います。実現性の問題で荒唐無稽な、我々の技術で出来ないこともありますので、そういう技術ならこちらでも持っていますよというところをまた紹介していきながら、そういったところと結びつけながらやっていこうと思います。なによりも、この地域で採れる日本一の長芋、ニンニク、ゴボウがありますので大事にしていきたいと思っています。

(大山会員) 産学官連携ということで、上北にはいい農産物があり、畜産も盛んであるし、北里大学や県の研究施設もあるということで、この十和田市の地元の大学である北里大学が持っている研究のノウハウを活かし、素材と頭脳を結集して取り組んでいく必要があると思っています。

(議長) それでは、高橋先生に、この提言骨子案についてご意見をいただきたいと思っています。

(高橋教授) 9ページに、北里大学の農業、環境、医療等の連携というのが記載されていますけれども、これについては、北里大学の大学本部においても、このような方針を本年度から示したということです。特に北里大学は他の大学と違いまして、医学部、獣医学部、それから薬学部、理学部、水産学部がありまして、医を頂点とする理工系の学部の総合大学で、それは日本だけではなく世界にもちょっと例がないという特殊な集団であります。それと同時に、この医を更に発展させながら、農と医を連携し、さらにまた環境というのも加えて、この三つの連携を進めていこうという試みが立ち上がったばかりです。

従いまして獣医学部の方も、私も環境分野を30年以上もやってきたことから、担当の常任理事の方からは、北里大学の十和田に居る間に農・環・医を少し考えなさいと言われていました。まだ来て5ヶ月ですので、学部外の方もこれから動いていきたいと思っています。また、今一つ私個人が考えておりますのは、先程、岩瀬先生が、コーディネーターの重要性ということをおっしゃいましたが、産学連携においては、まさにそのとおりだと思います。東京大学がこれだけの金を集めたというのもコーディネーターを民間企業から特任教授として10名くらい招聘していることもあります。それで民間企業から出資金を取ったお金で給料を払っているんですね。更にその方々が、いろんな研究助成の申請とか、あるいは官庁の予算要求に際して要求書を書いて、自分らも少し頂こうという動きで今頑張っているということです。私自身もいずれ、この上北地域に、産学公連携を

実現するには、マーケティングセンスを持った技術者のコーディネーターがいるんじゃないかなあと思っています。そして、これをどうやって確保していくのかっていうのが大きな課題です。

さっきの講演で少し申し上げましたけれども、お隣の方が何をやっているのか、どういうノウハウがあるのかわからないということで、私にもわかりませんし、皆さん方も各市町村の事情を言われても、分からないことがあると思いますが、産学公連携でも市町村連携でもそうじゃないかなと思います。もう少しそういう情報を、シーズとニーズをそれぞれ把握して議論する場が必要だなということで先程の広域連携ということも大事になるのではないかと思います。INSとかTNSの話をしたんですが、あと、これは非常に時間が掛かるんですけど、特にニーズを持っている方々、産業界の方から大学の方へむしる声が掛かっているんですね。それからもう一つは、産学公連携で、ここには大学が一つしかないんですね。それで産学公連携が一番必要とするのは、民間、もう少し別の農林水産系、一次産業系じゃなく、加工技術とか情報技術とか、あるいは工場でメーカー系に近いような企業集団もこの界限に相当おられるんじゃないかな。でそのような方々がどのような連携をし始めるのか、八工大の方に行くのか、あるいは、ここで見直す必要があるんじゃないかなと。というのは農林業にしてもIT技術も必要です。ハイテクの技術も導入してやらなければならないし、要するに、効率化、省力化を図ったり、それから、非常にコストダウンされたいろんな照明系の器具をうまく一次産業に使うというやり方も出てくるわけで、そういう情報交換の場も拡大しながら出来るんじゃないかなと思っています。

実は、私、栃木県の経済同友会に提言を出すきっかけとなりましたのは、宇都宮大学に在任時にロータリークラブに入りました。学校の先生は給料が安いですから、年会費20万円はしんどいですが、女房を説得しました。このロータリークラブに経済同友会のメンバーが何人かいて、それで、県の経済産業振興と民をセットにしてしまおうということで、毎月の勉強会に欠かさず行っただけです。当然毎月、日中に経営の勉強会で半日、そして4ヶ月に1回は飲み屋さんですね。そうすることで彼らの本音を知ってお手伝いできたというわけです。ということでやはり経済界の方々とも少し議論をさせて頂いたらありがたいなあと思っているんです。そしてそこで何か芸を出して行ければと思います。

(議長) 農業資源等の活用と観光資源の取組について、上北地域には十和田湖・奥入瀬川という国内有数の観光地があり、今後の観光振興においても、この十和田・奥入瀬を中心にルートづくりや情報発信を行っていくことになると思います。併せて上北の新しい魅力づくりを進め、特に団塊世代をターゲットとし、体験滞在型のメニューを開発する必要があると思われます。そうした中で、上北地域において農林畜水産業が盛んであることや、豊富な食材を有していることが強みとなり、グリーンツーリズムや農家レストランといった取組は、農林畜水産業と観光を同時に活性化する方法として大変有効であると考えますが、この点について、ご意見を伺いたいと思います。

(上野会員) 私自身はグリーンツーリズムという分野は得意ではないんですけども、最近は小中学校に関して就農体験などの体験学習などが増えてきていますので、修学旅行とタイアップした就農体験とかができればよいと思います。

(佐藤会員) すみません。この会に合うだろうということで、具体的に提案という形で紹介させていただきます。プリント2枚でA4版1枚ものとカラープリントをご覧ください。古牧温泉ですが、

会社名は奥入瀬観光となっています。今日も話を聞いて広域連携は難しいなぁと思いながら、行動案をつくって参りました。この協議会に参加する前から、何か面白いことを地域と連携してやることで地域のためなって、しかも自分の会社の再生にも弾みがつくものはないだろうかと考えている中で、「収穫祭」というものを出来ないかなぁとっておりました。実は津軽地区では「農林祭」というのが行われていて、南部地方にはないようなので、出来ないかなぁとっておりました。

第1回の元気結集協議会で、古牧温泉というのは年間20万人近くが来て首都圏とつながりがあり、私どもの役割は広報役であり販売役である。そういった地域の魅力をうまくつなげて一緒に潤いたいし、できることはやりますよというお話しをさせて頂いていました。そこで、早速お持ちした次第です。

今回の提言の8ページの具体的取組内容のところ、上北の農林畜水産物のフェアの開催による地元消費者の交流及び十和田湖をはじめとする観光地の特産品フェアの開催というような記載がありますが、これに沿ったような形で、今年に関しては私どもが中心になってやりたいと思っています。

内容について説明しますと、開催の概要ということで、近隣地域の農林畜水産資源の振興と発展と偉そうなことを書いてありますが、取れた収穫物あるいは作られた物をPRしましょうと。それによって参加者の数も増えて、ますます青森としていいところを見て貰いたいし、結果的に古牧もお客さんが増えて儲かりたいなという考えです。開催日については10月13日と14日の2日間で、宿泊の方もいるので、朝市もかねて7時から夕方5時までということで予定しています。場所は古牧グランド敷地内の駐車場にテントを張ってやることを考えています。開催目的は、県特産品をPRすることで、実は東京の旅行会社にもこういう企画があるんだという話を既にしております。最初は、当社の下でやるしかないということで、集められるところだけとっていたんですが、準備段階で、県の関係の方あるいは市町村あるいはJRとかにご相談する中で、いろいろアイデアがでて、一緒にやろうという話が出てきたので、今回も企画させていただいている次第です。PRしていただいて、ブースを設けて採れた物や作った物を販売しますし、イベントとしてマグロの解体ショーとかあるいはせんべい汁をやりたいとか、決め手君に来ていただくとかということをやろうと思っています。また、せんべい汁で知られているトリオ・ザ・ポンチョスにも予約をしてみたいと思っています。それで、イベント性も持たせてやります。せんべい汁は八戸じゃないかという意見もあるかと思いますが、青森県でやるというのが私どもの発想ですし古牧自体は「のれ、それ、青森」ということで青森県を売っていこうということをコンセプトとしていますので、あまり制限は設けたくないと思っています。ただ、地元三沢市にある温泉ですので、上北の方には是非たくさんお越し頂いて感動していただけたらと思っています。郷土芸能、三味線や民謡なんかもありますし、併せて近隣の施設関係の団体の方々にも、そちらのほうは出演料無しで来ていただいて、交流の場にもしたいなと考えています。

それで、古牧温泉としてできることですが、これは場所の提供、そして集客ツールとして、宣伝になりますが新しい露天風呂ができましたので、通常1,200円のところを割引してお入りいただくこととしています。実は、広告宣伝費は結構かかります。さまざまな助成金などもあるのですが、残念ながら急遽決めたことなので、とても間に合わないため、その中で私どもが出すしかないなというので、正直申し上げて、これは赤字イベントです。ただ、先程の話の汗水・金を出さなきゃということもありますし、最終的にこの中から忘年会などを古牧で開いていただいたらいいとか、泊まりにも来ていただけたらいいなとかいう思いもあって、今年は会社の経費で落とそうと思って

います。イベントとしてヨサコイソーランもやって、うちのチームも出るとか、こういったこともできればいいとか思いは膨らむばかりなんです。こんな形でやるので、ご参加いただける団体とか、地域の方がいれば、是非ご参加いただきたいと思っています。申込要領はまだできていなくて、今月中に仕上げ、関係各位に配布しますので、参加される方には是非来ていただきたいと思っています。出店に当たっては多少の出展料を負担していただきますが、これで私どもは儲けるつもりはサラサラなくて、自社のPRになればという思いで、今回企画をさせていただきました。

(小笠原会員)古牧の収穫祭のお話は道の駅小川原湖にもあったんでしょうか。まだでしたら、道の駅の方へ情報提供をよろしくをお願いします。

私は、JA女性部ということで、小川原湖の近くで農家レストランをやっています。役場とJAの協力のお陰で平成11年度から開きました。ここでは長芋すいとんとか長芋ジュースなどを提供しており、メニューは少ないんですけど、そこに来るお客さん達には喜ばれています。うちのレストランは、冬も営業していますが、十和田湖冬まつりに行った東京からの観光客で、十和田湖からの帰りに小川原湖に立ち寄って、十和田湖よりも小川原湖の方がいいんじゃないかと言ってくれる方もいます。けれども、私たちは宣伝する力が無いということで、すごく反省しています。

青森県の小川原湖、東北町の小川原湖を全国に宣伝して、長芋ジュースや長芋すいとんを宣伝したいと思っています。三沢空港や八戸の新幹線で帰って行くお客さんをすごく欲しいんです。そこで、どういうふうにするかが毎年の課題となっています。是非、十和田湖と一緒に小川原湖も宣伝してもらいたいと思います。

長芋やニンニクを宣伝していくことも大切で、今、私たちは長芋を入れた長芋ドーナツを開発しています。先程、広域連携とか市町村合併が難しいという話も出ましたが、私たち新東北町は合併しました。道の駅は、旧東北町と旧上北町のお母さん達の交流がすごくうまくいって、友の会の売上も伸びており、やはり、これはお母さん達の実行力です。異論を述べるよりも動くということで、私たち農家のお母さん達は、実行することによって、前向きに農家レストランの活動等を頑張っています。

(野崎会員)農家レストランにはまだ取り組んでいませんが、やりたいと思っています。私は農家ですが、土作りからこだわっています。私の地域は新幹線駅の八戸にも七戸にも近いし、インターネットもやっています。ただ土作りとか野菜作りはできるんですが、うまく売る方法を知りませんでした。ここの協議会に来たお陰で、ニンニクが売れて注文が増えました。良く、なんで売りに来ないんだと言われます。黙って立っていても売れないということですが、どうすればいいのか少し分かってきました。自分が一生懸命作ったものをわかってもらって、買ってもらうためにも、勉強しなければだめだと思っています。

(高橋会員)さっき小笠原さんと野崎さんから農家レストランや販売のことで話がありましたので、参考に申し上げますが、農林水産省の農村振興局管轄で、グリーンツーリズムとか農家レストランを扱っている団体があります。そこでは農家レストランのマニュアルも作っていますし、グリーンツーリズムの受入先をホームページにリンクさせることもできます。今は非常に整備が進んでおりますので、そういうところに、自分らのホームページを貼り付けて貰うということも考えてはどうかと思います。

(議長)アドバイザーの堤さんからご意見をいただきたいと思います。お願いします。

(堤アドバイザー)グリーンツーリズムについては、県内でもホームページをリンクして受入を行っているところもあります。今日は、グリーンツーリズム十和田の天間さんがいらっしゃいませんが、上北は、自然も十分あり食も豊富ですので、是非力を入れていく必要があると思います。また、一般に、生産量が多いということでブランド化に繋げるということはあります。しかし上北にはこんなにたくさんの日本一の生産量を誇る産品があるにもかかわらず、ブランド化がされていないという状況ですので、まずは、地元の食材を利用して、地元の人がおいしいものを食べるということからはじめて、旅行者のために作るということではなく、自分たちが食べておいしい、だから外から来る人にも食べさせたいというようなサービスに関する取組みを考えてもよいと思います。

(議長)いろいろご発言ありがとうございました。今日は骨子案をもとにして、皆様からご意見をいただいたわけですが、今後、ご意見を踏まえて更に検討させていただき、必要に応じて、個別のインタビューを行うとか、関係機関や顧問の助言等もいただきながら、提言内容に反映していきたいと思います。

また、この提言を取りまとめた後、元気づくりに係る具体的な実施内容や時期、実施主体等についても更に検討し、上北の元気づくり推進プログラムとして整理したいと考えておりますので、どうぞよろしくをお願いします。

#### 4 - (2) その他

(議長)それでは、次に「その他」ということで、皆様から今後の進め方等に関するご提言や情報提供等について何かございませんか。それでは最後に事務局から連絡事項があります。

(事務局)第3回協議会の開催時期については、11月を予定しています。追ってご案内をさしあげますのでよろしくをお願いします。

(議長)本日の議事については以上で終了いたします。皆様には、長時間にわたりまして、熱心なご討議をいただきありがとうございました。

#### 5 閉 会

(司会)以上をもちまして、第2回上北の元気結集協議会を閉会します。どうもありがとうございました。